

野と連携し、ここで取り上げた様々な困難な課題に立ち向かう必要があるだろう。

参考文献

Hammer, K. *et al.* 1997. Weeds as genetic resources. *Plant Genetic Resources Newsletter* 111, 33-39.
IPBES. 2019. Summary for policymakers

of the global assessment report on biodiversity and ecosystem services of the Intergovernmental Science-Policy Platform on Biodiversity and Ecosystem Services. Díaz S *et al.* (eds.). IPBES secretariat, Bonn, Germany. 56 pages.
伊藤幹二 2013. ‘草’は表土を創り育む：日本人が忘れていた大切なこと。草と緑 5, 16-27.
Petitet, S. *et al.* 2011. Weeds in agricultural

landscapes. A review. *Agronomy for Sustainable Development* 31, 309-317.
国際連合 2019. 持続可能な開発に関するグローバル・レポート 2019. 未来は今：持続可能な開発を達成するための科学〈抄訳版〉. United Nations. *Transforming our world: the 2030 Agenda for Sustainable Development*. (https://www.un.org/ga/search/view_doc.asp?symbol=A/RES/70/1&Lang=E)

田畑の草種

顎無（アギナシ）

中宮定子様が崩御された後、私は宮仕えを辞めました。思えばお仕えて以来、定子様から限りない恩寵を賜りました。あるとき定子様の兄君の内大臣伊周様が高価だった和紙を一条天皇と中宮定子様に献上されました。定子様が「帝は『史記』を書きされるそうだが、こちらは何を書こうか」と下問されたとき、「それなら枕でございましょう」と申し上げたのですが、「それなら、おまえにあげよう」とおっしゃって、そのまま下されました。私は帝がおっしゃった「史記」から「敷布団」、^{しきたえ}「敷妙」を連想して、「敷妙の」が「枕」の枕詞であることから「枕」と洒落のつもりでお応えしたつもりだったのです。その後「春は」「夏は」と「四季」のお話で書き始め、ついつい変なことまで書き連ねてしまいました。

思えば、「草は」と書き始めて「沢瀉」は名前が面白い。ふんぞり返って偉そうにしている」と書いてはみたものの、顎の張ったふんぞり返った殿上人はあまたおられるのですが、かの道長様などは、定子様が一条天皇のご寵愛を受けている折には顎も出さずに大人しくなさっておられたのですが、定子様の父

(公財)日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地 須藤 健一

君の道隆様が亡くなれると、急に顎を突き出してふんぞり返り始めました。それは「沢瀉」のように慌てて顎を出すのではなく、ゆっくりと顎を出してくる、まるで「顎無」のようだったのです。

このことを「枕」の中に書いてはいたのですが、定子様が崩御された後、あまりに道長様のことを悪く書くのも憚られ、「枕」から外したのです。(清少納言・談)

アギナシはオモダカ科オモダカ属の抽水性の多年草。北海道から九州の、比較的自然度の高い山間部や農耕地周辺の湿地、休耕田などに生える。環境省の準絶滅危惧種。同属のオモダカに非常によく似るが、オモダカのように水田に生えることは殆どなく、背丈も高い。オモダカと同じような矢尻型の葉を出し、矢尻葉の側裂片の先端がアギナシでは丸みを帯びるといふが両者を並べて比べないとよく分からない。生育の初期にはへら状葉で、次第に矢尻葉に変わっていくが、オモダカに比べて矢尻葉になるのが遅い。清少納言はそのことを枕草子に書こうとした。